

長安の青龍寺の遺址に就いて

文學博士 桑原隲藏

一
唐時代の長安城内に在つた諸寺院の中で、我が佛教界に尤も親密な關係を有ち、従つて我が國民の尤も記憶すべき寺院としては、先づ第一に青龍寺を挙げねばならぬ。我が弘法大師が青龍寺の惠果阿闍梨に就いて請益されて以來、入唐の大徳は慈覺大師でも智證大師でも、皆青龍寺に留錫するといふ風に、我が國の佛教と尤も深い緣故を有つた寺である。それに拘らず青龍寺の遺址は、最近まで我が學界にも教界にも、よくは知られて居なかつた。明治四十年の九月十月の交に、私が長安の舊蹟を探訪踏査した時にも、自分の不用意から青龍寺の遺址査覈に手を著け得なかつた。

明治四十二年に私が歸朝して、京都帝國大學に奉職した後に、『嘉慶咸寧縣志』を檢閲して、始めて青龍寺の遺址を髣髴の間に知ることが出來た。ソコで大正十年六月に東寺で開催された弘法大師降誕會で、私が「大師の入唐」といふ講演を試みた折に、青龍寺の遺址に言及して次の如く述べて置いた。

『咸寧縣志』卷十二に

石佛寺即唐青龍寺。在祭臺村。

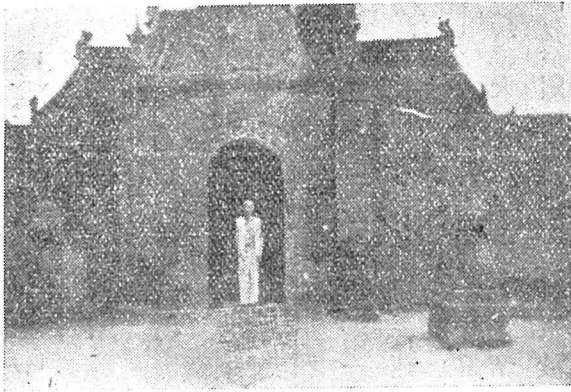
こあれば青龍寺は後に石佛寺と名を變へて、嘉慶時代まで存在したものに見える。祭臺村は今の長安縣の西南郊外、我が一里強に當る。私は長安へ出掛けた時分に未だこの事實を承知せなかつた爲め、石佛寺を探訪

せず、今日まで遺憾千萬に思ふ。私の前後に長安に出掛けられた人々が尠くないが、誰も石佛寺の現状を審にせぬ様である(『大師の入唐』六四頁)。

所が私のこの論文によつて發憤して、眞言寺の青年僧侶の和田辨瑞君が、大正十三年の夏秋の交

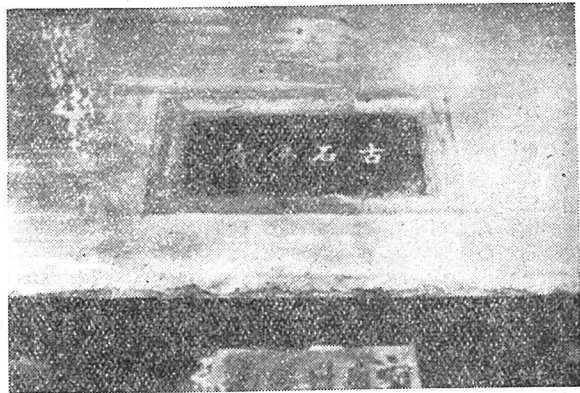
青龍寺遺址の現状

(和田辨瑞君撮影)

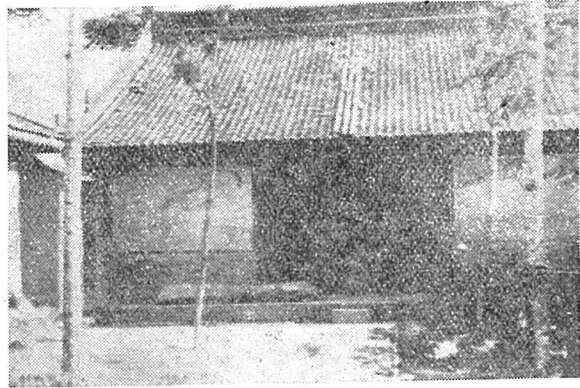


1 その入口

に遠く長安にまで出掛け、石佛寺の所在を探訪して、その寫眞を採り、その現状を傳へた。ここに掲げた石佛寺の寫眞は實に和田君の撮影の一部である。石佛寺の現状に就いては、同君が大正十四年二月の『新興』に掲載された「支那密教史蹟踏



2 入口に在る石佛寺の題額



3 その天王殿

「査記」を参考すべきである。忌憚なき私の希望を申せば、和田君が折角長安まで出掛けられたこと故、石佛寺の所在を中心として、今の長安縣城の東南郊の實測圖か、それが不可能ならば、責めてこの方面の信賴すべき見取り略圖でも齎らし歸ら

れたならばと思ふが、そは兎に角、石佛寺を探訪して、その現狀を我が教界に傳へた點だけでも、私共は同君の功勞に對して、相當の感謝を表せねばならぬと思ふ。

和田君が上述の踏査記を發表して後ち、八ヶ月許りを經て、大正十四年九月發行の『宗教研究』（新第一卷第五號）に、常盤大定博士が「我が東台兩密の發源地たる唐の青龍寺につきて」といふ論文を掲げて、石佛寺を青龍寺の舊址に擬する『嘉慶咸寧縣志』の説を否定された。私は平常『宗教研究』を閲讀せぬので、常盤博士のこの論文の發表を知らずに、一年有餘を経過し、今春四月に他から注意されて、始めて寓目の機に接した。

常盤博士は私の舊識で、夙に支那の佛教史蹟の研究者として世に聞えた篤學者である。殊に當面の論文に就いては、その冒頭に、

學界の批評を請はん（が爲め）………記事は煩瑣な考證

を交へて居る(『宗教研究』二六頁)。

に注意されてある程、快心の論文と見受けたから私は可なり鄭重に閲讀した。されど閲讀後に於ける自分の所感を率直に吐露すると、私はこの論文に就いて、可なり失望を禁ずることが出来ぬ。石佛寺の所在地を青龍寺の遺址とする舊説に對する反駁も誠に薄弱であり、又博士が新に提唱された青龍寺の遺址としての擬定も實に不確である。當初の期待が多大なりしだけ、閲讀後の失望も亦多大である。ソコデ私は四月九日に念の爲め同博士宛に左の三點に就いて質問書を發送した。

(一) 貴下は長安地方を踏査されたことがある歟。
(二) 若し有りとせば、特に石佛寺所在地附近を踏査されたことがある歟。

(三) 貴下の論文は石佛寺の所在地を青龍寺の遺址とする舊説に反對すべく努力せらるゝ割合に、貴下の新に擬定されんとする青龍寺の位置を明示す

べく努力されて居らぬ。貴下は果して青龍寺を那邊に擬定さるゝ歟今少しく具體的に明示されたい之に對して常盤博士より早速大要次の如き内容の回答を接手した。

(一) 長安地方を實踐して居らぬ。
(二) 従つて石佛寺方面を踏査する機會を有たぬ。
(三) 青龍寺は石佛寺の所在地たる祭臺村より尠くとも更に東方一〔支那〕里程の場所に當ると想ふ。
〔大正十四年九月發行の『宗教研究』三六頁の甲乙兩圖は全く重ね見るを得べく、上圖の毎方二十里といふは、下圖の毎方二里といふに同じく、〔實は〕毎方二里に當る。兩圖を重ね見るに、祭臺村よりも青龍寺は東方に在る。或はそれよりも一層東方に寄るとも、西方に在らずと確信して居る。
尙ほ同博士はその回答中に、こは、全く文献上のみの研究なるも、文献上ではこれ以上を望み難いといふ、相當強い自信を有することを附言された。

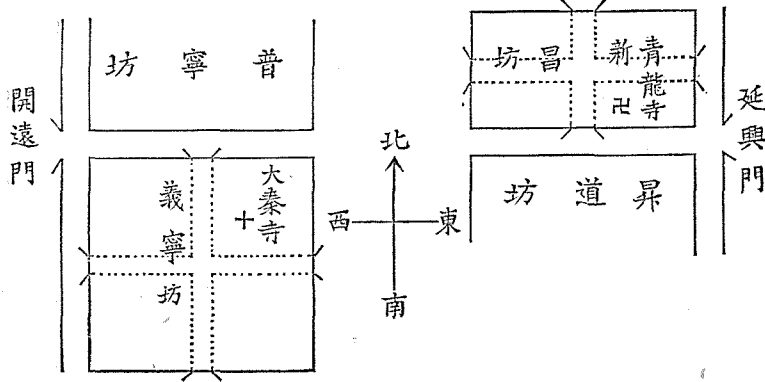
私は上述の如く常盤博士のこの論文に對しては可なり失望を覺え不滿を感じたのであるが、萬一博士の所論が實地踏査の結果ならば、不滿や失望に拘らず、私としては今一度反省顧慮せなければならぬ筈である。所が博士の所論が、全く文献上の研究の結果とあれば、私は何等顧慮する所なく文献上より之に反對せなければならぬ。

二

失禮ながら常盤博士は文献取扱の上に於て、可なり錯誤がない歟と疑ふが、それは後の指摘に譲ることにする。元來青龍寺の所在を決定する第一の鑰は、唐の長安の延興門の所在を明にすることである。申す迄もなく延興門とは、長安の京城の東面に北から數へて、通化門・春明門・延興門とある、その延興門である。延興門を入ると、その延興門街の北方が新昌坊で、その新昌坊の南門の東邊、即ち延興門寄りの方面に、青龍寺が存在し

て居つた(北宋の宋敏求『長安志』卷九、參照)。唐の長安城の四至は頽圯して、今日では正確に知り難い中にも、その東面は猶ほ幾多の遺址を存して居る。延興門はその一である。延興門は今は元興門として知られて居る。元 *Yuan* と延 *Yen* とは字音が極めて近似するから轉訛したものに過ぎぬ。丁度唐の東内の正殿たる含元殿の南門の丹鳳門の所在地が、今は午門村として、又は同音異字の五門村として知られて居るのと同様である。

この元興門(即ち唐の延興門)の所在地を基點として、その西方―或は幾分北に偏せる西方―我が數町の内に、恐らくば四五町の内に、青龍寺の位置を指定し得る筈である。丁度延興門と反對に、長安城の西北隅に近く設けられた開遠門の所在地を基點として、開遠門内の義寧坊に在つた、大秦寺の位置を指定し得るのと同様の關係に在る。『嘉慶咸寧縣志』の編纂者が、祭臺村の石佛寺を唐の



青龍寺の遺址に擬定したのは、實にこの延興門の所在地を基點とした結果である。彼等編纂者はこの點に就いて、事々しき考證を記述して居ないけれど、その今城唐城合圖(原板『嘉慶咸寧縣志』卷三所收)を一瞥すれば、更

にこの今城唐城合圖の末に附識せる按語を一讀すれば、容易にこの間の消息を悟了することが出来ると思ふ。

青龍寺が後に石佛寺と改稱したもののか、或は青龍寺の別名が石佛寺であるのか、將た又青龍寺と石佛寺とは、全然別箇の寺であるのか。何分文献が足らぬから、その關係を確實に知ることが出来ぬ。青龍寺と石佛寺との關係は不明としても、それは青龍寺の遺址を決定するのに格別の差支を生せぬ。その關係は必要な條件でないからである。かの大秦寺と崇聖寺や崇仁寺や、又は金勝寺との關係が不明であつても、今の金勝寺の境内を、唐の大秦寺の遺址と認むることに就いて、すべての學者は何等の異議を挾まぬ。青龍寺の遺址問題も、之と同様である。

青龍寺の位置を認定する爲に、興善寺や慈恩寺との相互の距離や方向の關係を考慮するのも、一

の方法であらう。されど誰人も今日では唐時代の里長や歩長を的確に知ることが出来ぬ。里長や歩長の不確な間は、距離の遠い興善寺や慈恩寺を基點として、青龍寺の遺址を考定するのは、勞多くして功が尠い。故に青龍寺の遺址を決定する條件としては、距離の遠い興善寺や慈恩寺は、第二義若くは第三義のものである。第一義の必須缺くべからざる條件としては、距離の近い延興門を推さねばならぬ。

所が常盤博士は、この大切な延興門と青龍寺との關係を全然看過忘却して、偏に興善寺や慈恩寺との關係のみから、青龍寺の遺址を決定せんとした所に、大なる缺陷があると思ふ。加之博士が興善・慈恩・青龍三寺相互の距離を論せらるる間にも、可なり大なる差誤がある。此の如くして折角の博士の熱心なる研究も、その努力の割合に、その收獲の十分でないのは、蓋し已を得ざる結果と申さ

ねばならぬ。

三

石佛寺の所在地を青龍寺の遺址に擬定した『嘉慶咸寧縣志』の卷十二に、

石佛寺即唐青龍寺舊。在祭臺村採訪。

と記載してあるに據ると、この擬定は舊志——『康熙咸寧縣志』——に本づき、更に實地の踏査によつて、之を確實にしたものと認めねばならぬ。同じく卷三の今城唐城合圖の按語にも、

城内諸坊。若安仁坊之薦福寺浮圖俗呼小。進昌坊之慈

恩寺浮圖俗呼大。薦善坊之興善寺。新昌坊之青龍寺。

今名石。佛寺。皆迄今不改。

と明記してある。

一體唐時代の長安の舊蹟を調査すべき文献資料は、唐の韋述の『兩京新記』の殘本、北宋の宋敏求の『長安志』、南宋の程大昌の『雍錄』を始め、降つては清の畢沅の『關中勝蹟圖志』、清の徐松の『唐

兩京城坊考』等、その數は決して尠くない。されどその舊蹟の擬定に就いては、私の知れる限りに於て『嘉慶咸寧縣志』を第一に推獎せなければならぬ。そは記録と實地とを併せ照らして、舊蹟を考定した點に特色があつて、彼の支那人一流の漫然古記録を臚列するものと、多少その選を異にするからである。

私は長安の舊蹟考据に就いて、相當の自信を有つて居る。その經驗によつて、常に『嘉慶咸寧縣志』を推獎して居る。流石に陸耀遹や董祐誠の編纂した程あつて、普通一般の縣志と同一視すべきでないと思ふ。陸耀遹や董祐誠は、或は金石を以て、或は數理・輿地を以て、當時に著聞した學者たること、事々しく茲に紹介する迄もない。

所が常盤博士の研究は、文献を主とせらるゝに拘らず、獨りこの長安の舊蹟探訪に關する文献中尤も推獎すべき『咸寧縣志』は餘り信憑されぬ様で

ある。博士は恐らく陸耀遹や董祐誠の學績や名聲を、十分に承知されぬのであるまい歟。そは兎に角常盤博士は、『嘉慶咸寧縣志』の石佛寺所在地を青龍寺の遺址に擬定する説を非難して、

「嘉慶縣志」——〔即ち陸・董二氏の編纂した「嘉慶咸寧縣志」——は根據が分らぬながら、「康熙縣志」の儘を繼紹したのであるから「康熙縣志」の判斷が誤つて居れば、當然「咸寧縣志」の敘述も誤つて居ることゝならざるを得ぬ。「康熙縣志」の著者は、恐くは祭臺村の石佛寺が、大體に於て同じ方向にあるが爲に、何の研究をも加へずに、容易に之を青龍寺と速斷したものである。……………「嘉慶咸寧縣志」の記事は少くも趙誦の實地踏査の記事と矛盾する。……………いつれに従ふべきかと言はば、予は躊躇なく趙誦の「訪古遊記」の記事に信を置くのである〔宗教研究〕三四—三五頁〕と述べられて居る。

申す迄もなく『嘉慶咸寧縣志』とて、決して完全無缺のものでない。その間に若干の缺陷が存する

としても、その編纂方針は極めて堅實で、或は

方志考古。多言在縣某方。或言某方幾里。方隅

遼闊。求古蹟者。何所指證。今志於考據古蹟。

〔必實指其地某村。疑者缺之。不敢臆斷。〕

といひ、或は

舊志凡引故書。不注所出。悉檢舊文。爲之補注。

有未詳所出者。亦注明舊志。不敢整空。

といふ。その實地の查覈に於て、文獻の利用に於て、流石は陸・董二氏の如き學者の編纂とて、殆ど間然する所なき方針であるまい歟。

かゝる方針を採る『嘉慶咸寧縣志』の編纂者が、常盤博士の想像さるゝ如き、輕忽な擬定を敢てしたであらう歟。將た又常盤博士をして何等躊躇する所なく、『嘉慶咸寧縣志』以上に信頼を置かしむる趙嗣の「訪古遊記」の記事は、爾く正確なものであらう歟。

この趙嗣は元來金石學者である。彼は明の萬曆

四十六年(西紀一六一八)に、古碑探訪の目的で、

(一)終南山方面や(二)唐の太宗の昭陵の所在地の九峻山方面や(三)長安の南郊を遊歴した。その紀行が即ち「訪古遊記」である。「訪古遊記」と稱する單獨の著書は存在せぬ。趙嗣の『石墨鐫華』(卷七)中に附録として掲載されて居るに過ぎぬ。元來趙嗣の遊歴は古碑探訪が目的で、舊蹟の查覈が目的でない。殊に長安の南郊の遊歴に就いては、薦福寺・興善寺・慈恩寺(大雁塔)・青龍寺や、杜陵・張曲・少陵原方面を、一日の裡に遊歴して居る。この方面の大部分は、私も親しく遊歴した。城内から出て一日の裡に以上開列した城南の諸古蹟を歴訪するのは、可なり多忙の行程で、古碑に關係の尠い青龍寺の遺址などは、十分に查覈する餘裕のある筈がない。

『嘉慶咸寧縣志』は兎に角學殖ある陸・董二氏を幹部とし、その配下に二十人近くの舉人や生員を

採訪として、實地の調査に當らしめ、相當の年月を費して編纂されたものである。「訪古遊記」と『嘉慶咸寧縣志』と何れが信憑すべき歟は、冒頭から容易に判定されるではない歟。この「訪古遊記」の内容に就いては、後に今少しく具體的に批判したいと思ふ。

四

常盤博士は『嘉慶咸寧縣志』に突如(?)として石佛寺を唐の青龍寺の遺址に擬定したことを、殆ど根據のないかの様に、若くば頗る根據の薄弱な様に見做されて居るが(『宗教研究』三三—三四頁)、『嘉慶咸寧縣志』の説は、その編纂者の明記せる如く、『康熙咸寧縣志』に本づいたものである。その『康熙咸寧縣志』の所説を、何等の研究を加へざる全然架空の臆測とするのは、聊か常盤博士の武斷であるまい歟。

『康熙咸寧縣志』以前に、明時代の『萬曆咸寧縣

志』があつた。この『萬曆咸寧縣志』は嘉慶時代には佚亡不傳としても、康熙時代にはその幾分が存在して『康熙咸寧縣志』の編纂者は、明にそれを利用して居る。『萬曆咸寧縣志』は萬曆四十年(西紀一六一二)の編纂で、即ち趙嗣の「訪古遊記」を作つた時代に當る。『康熙咸寧縣志』が石佛寺の所在地を、青龍寺の遺址に擬定したのは、『萬曆咸寧縣志』の記事を襲踏したものである歟否歟は明白でない。併し襲踏せずとも、『康熙咸寧縣志』の編纂されたのは康熙七年(西紀一六六八)で、趙嗣の時代を降ること纔に五十年に過ぎぬから、その時代には青龍寺の遺址は猶ほ指示し得られた筈と想ふ。従つて常盤博士の如く、石佛寺即唐青龍寺の一句を、全然『康熙咸寧縣志』の編纂者の架空の臆測の如く認定するのは、やゝ武斷に過ぐと申さねばならぬ。

青龍寺と石佛寺との關係は、明瞭にすることが

出來ぬ。されど石佛寺といふ名稱は、俗稱に相違あるまい。莊嚴寺に木塔があつたから、俗稱を木塔寺といひ、龍興寺に大佛があるから大佛寺の俗稱を得たと同様に、青龍寺に著聞した石佛一例へば常盤博士が青龍寺將來の石佛として『宗教研究』の卷頭に紹介された如き優秀な石佛があつて、民間で石佛寺と稱せられたかと想ふ。勿論これば想像であるが、同時に蓋然性の強い想像である。

或は趙嗣の記事の如く、萬曆四十六年の頃に青龍寺は已に頽圯して居つて、やがてその遺址に石佛寺が創建か再建かされたもの歟も知れぬ。

されど青龍寺と石佛寺との關係如何とか、石佛寺が何時代に建立されたとか、此等の問題は青龍寺の遺址を決定するに當つて、必しも緊要な條件でない。かゝる問題は姑く未定の儘に措きても、他の方面から青龍寺の遺址を考定することが出来る。それは曩に已に述べた如く、延興門の遺址を基

點とした唐の青龍寺の位置が、正しく祭臺村の石佛寺に該當するといふ事實である。『嘉慶咸寧縣志』卷十二に明記せる如く、その編纂者が石佛寺の所在地を、唐の青龍寺の遺址に擬定したのは、一面では『康熙咸寧縣志』の所説に本づき、一面では探訪員の實地の調査を経て決定したものである。常盤博士の想像さるゝ様に、無批判に盲目的に、舊志を襲仿したのでない。

假に『嘉慶咸寧縣志』の擬定が突如としても一即ち嘉慶以前に祭臺村の石佛寺を青龍寺の遺址とする説がなく、『嘉慶咸寧縣志』の編纂者が、この説を創唱したとしても一それは青龍寺の遺址を祭臺村に在りとする所説の效力を減少するものでない。石佛寺即唐青龍寺説の擬定が、突如であつたかかなかつた歟は格別の問題でなく、この擬定が文獻に將た實地に照合して、妥當なりや否やが要件である。私は石佛寺即唐青龍寺説を文獻上より觀ても

恐らくは實地上より觀ても、動かし難き鐵案と思ふ。

曩にも一寸引合ひに出して置いたが、明末に有名なる大秦景教流行中國碑の發掘された、長安の西郊の金勝寺(『崇聖寺』)が即ち唐の大秦寺(『波斯胡寺』)の遺址であるといふ説は、『嘉慶咸寧縣志』及び『嘉慶長安縣志』の編纂者董祐誠(『董會臣』)の創唱である。彼以前に此の如き説を發表したものが無い點から觀れば、或は突如ともいへる。『嘉慶長安縣志』卷二十二に、

案長安志。皇城西第三街。從北第三義寧坊波斯胡寺。太宗爲大秦國胡僧立。其地正鄰唐城西垣。直今城西五里。今大秦景教碑在崇聖寺中。疑即古波斯胡寺也。と記し、又『嘉慶咸寧縣志』卷三に、

崇聖寺……………即唐波斯寺。太宗爲大秦僧立。故景教碑即出寺前土中。……………其西有驢垣。斷續迤南即城西垣。

と載せてある。董祐誠は曩に『嘉慶長安縣志』を編纂した際には、今の崇聖寺を唐の大秦寺の遺址に擬する新説發表に、幾分遠慮の態度を持つたが、やがて『嘉慶咸寧縣志』編纂の際には、強い自信によつて斷案を下して居る。この斷案は山の如く動かし難い(拙著『東洋史說苑』所收『大秦景教流行中國碑』二八九—二九〇頁參看)。而して董祐誠の金勝寺即唐大秦寺説は、唐の長安の西面の開遠門の遺址を基點として、義寧坊に在るべき大秦寺の位置を考定したのである。陸・董二氏の石佛寺即唐青龍寺説が、唐の長安の東面の延興門の遺址を基點として、新昌坊に在るべき青龍寺の位置を考定したのと同方法に出て居る。私が『嘉慶咸寧縣志』の編纂者に信賴する所以、又その編纂者の青龍寺の遺址の擬定の信賴すべき所以は、之にて明瞭と思ふ。

石佛寺の所在地が、唐の青龍寺の遺址たるべき理由は、上來十分に述べ盡した。顯正の方面はこれだけで略遺憾なき筈と思ふが、念の爲に一應常盤博士の主張を検討して見たい。博士が非常なる確信を以て、『嘉慶咸寧縣志』の石佛寺即唐青龍寺説を排斥せらるゝ根據は、その『嘉慶咸寧縣志』卷三所收の今城唐城合圖に在る青龍寺の位置と、同書卷一所收の南關社圖に在る祭臺村(石佛寺の所在地)の位置と、一致し難いといふ點に在る。博士はこの點に立脚して、石佛寺即唐青龍寺説を論破すべく、約六頁に亙る大文字を列べられて居る。その大要を次に紹介する。

それは祭臺村の位置と青龍寺のそれとは到底一致せぬといふ事實からである。……………「咸寧縣志」それ自身の地圖(甲乙二圖参照)に基き、……………兩者の不一致を研究する事とする。

この研究に必要な名刹は青龍・慈恩・興善の三寺である

大興善寺は……………靖善坊にあり、一坊全體を占め、……………慈恩寺は……………進昌坊の東半を占め、青龍寺は……………新昌坊の南門の東にあつた。以上甲圖につきて指點する事が出来る。

三寺の位置が斯く明瞭になつて、さてその距離如何にいふに……………慈恩寺を中心としていふ時は、興善寺には西北行三里強、青龍寺には東北行四里許となり、興善寺よりも青龍寺の方が遠いのである。そは坊制を見れば明瞭である。慈恩寺のある進昌坊と興善寺のある靖善坊とは、東西一里半の安善坊を隔てるのみであるが、この進昌坊と青龍寺のある新昌坊とは、東西二里の脩行坊を隔てるのみならず更に東西二里の昇道坊の半分をも隔てるのである。次に來る問題は石佛寺のある祭臺村であつて、これと慈恩・興善一寺との關係を見ねばならぬ。幸にも乙圖に示せる如く、「咸寧縣志」第一の南關社圖の中に、……………祭臺村の名のみならず大雁塔村をも興善寺をも載せてある。……………即ち每方二里から割り出せば、大雁塔村の東北三里許の所に

(三卷志縣寧咸) 里二每 圖合城唐城今
方十

寺龍青 記³ 寺善興 記² 寺恩慈 記¹

(甲)

			寧	永	平	宣	昌	新 記 ³
	記 ² 善 靖		崇	永	平	昇	道	昇
朱		善 安	國	昭	行	脩	政	立
雀			昌	進 記 ¹	政	脩	化	敦
街			善	通	龍	青		芙蓉園
			濟	通	池	曲		

延興門

門德明

門夏啓

(一卷志縣寧咸) 二每 圖社關南
里方

(乙)

寺善興	坡廢草		魯家村	祭臺村
村菜小	村河水		村後	
		大雁塔村		觀音廟
				百池頭村
			頭坡朝	岳家寨

祭臺村を置き、西北四里強の所に興善寺を置いてある。……千載不動の大雁塔……を中心として、之

を甲圖に照合する時は、事實三里の興善寺を四里に置く以上は、事實四里の青龍寺は五里以上の距離に在らねばならぬ事なるのである。然るに祭臺村の距離は僅に三里外に置かるゝ。而もこの三里は、事實三里

の興善寺が四里に置かるゝ、割合から推せば、反對に二里半に短縮するのである。五里の青龍寺の位置と、二里半の祭臺村の位置とが、一致せざる事は明白でない。斯くて大雁塔を中心として甲乙二圖を合して見る時は、祭臺村の位置は右の昇平坊か、精々宣平坊の南部に當らねばならぬのであるから、新昌坊の青龍寺とは正に一里以上の距離がある。要するに祭臺村は方向に於て大なる誤ではない。然し距離の上に頗る差違があるから、縣志が村中の石佛寺を、唐の青龍寺と言つて居るからきて、直に之に従ふ(べきでない)……

…予は祭臺村の位置が青龍寺のそれではなく、青龍寺より西の方一里の外に在りといふに考へて、予は躊躇な

く石佛寺を以て青龍寺にあらずと斷言するのである(『宗教研究』三五一—四一頁)。

この主張の中には可なり澤山な間違や誤算があると思ふ。先づ第一に指摘すべきは、『嘉慶咸寧縣志』より引用せりといふ甲乙の二圖である。

博士は大雁塔を中心として、この甲乙二圖を重ね合せば直に古今の位置を對比出来るといひ、自宛の私信中にも、懇々この旨趣を申越されてあるが、之が抑大なる疑問と申さねばならぬ。その位置すら確實に明示されて居らぬ大雁塔を中心として、如何にして甲圖と乙圖とを重ね合せて對比し得るであらう歟。

(一) 甲圖即ち唐の長安圖に示してある、慈恩寺の位置は先づ大差なからう。北宋の宋敏求の『長安志』卷八に據ると、進昌坊の東半が慈恩寺の敷地で、その境内に大雁塔があつたのであるから、正確でなくとも大體の位置は推定され

る。

(一)されど乙圖即ち『嘉慶咸寧縣志』卷一所收の南關社圖には、全然大雁塔の位置を明指してない。大雁塔村の名は記載されて居るが、大雁塔の位置は見當らぬ。大雁塔は大雁塔村の附近に在るべきものとは推測されるが、假に大雁塔が大雁塔村と記載せる場所の頭部に位置するものと認める時と、その底部に位置するものと認める時とは、約二〔支那〕里、尠くとも一〔支那〕里の相違を生ずる。大雁塔村と記載せる場所の左部か右部かの場合にも、同様の結果を免れぬ。常盤博士は青龍寺の遺址を祭臺村に擬定するを排して、祭臺村より少くとも一〔支那〕里東邊に位置せなければならぬなど、舊説と一〔支那〕里の相違を争點とする程の細密な問題に、少くとも乙圖面では、約二〔支那〕里動搖する恐れある大雁塔の位置を、一定不動の如く輕信し、之を甲乙二圖の對比の基礎とせらるゝのは、

不注意千萬ではあるまい歟。

六

(二)常盤博士がその論文三六頁に、『嘉慶咸寧縣志』より轉載したといふ南關社圖即ち乙圖は、多少その原圖と相違して居る。原圖では祭臺村の位置が今少しく北偏キタヨリとなつて居ると思ふ。祭臺村の位置が興善寺の正東でなく、大體に於て東方で少しく北に偏して居らねばならぬ。故に原圖を根據とすれば、祭臺村と興善寺との方位關係が、唐時代の靖善・新昌二坊の方位關係と可なりよく一致することが出来る。

(四)常盤博士が『嘉慶咸寧縣志』卷三から轉載されたといふ今城唐城合圖、即ち甲圖に就いても一言の注意を述べ置きたい。この圖の每方二〔支那〕里は、唐の長安(京城)の東城壁を基點として、西方へ每二〔支那〕里の方眼を配してあるが、これは宜敷くないと思ふ。乙圖との對比上、朱雀街を

基點として、東方へ毎二〔支那〕里の方眼を配すべきである。私の手許にある『嘉慶咸寧縣志』には、不幸にしてこの甲圖に相當すべき原圖が脱落して見當らぬ。されど舊版『嘉慶咸寧縣志』を轉載したといふ、アヅレの今城唐城合圖 (Havret; La Stele Chrétienne de Si-ngan-fou. II Partie pp. 110—117) には、正しく朱雀街を基點として方眼を配してある。常盤博士の依用さるゝ今城唐城合圖の方眼の配當法の本づく所を確知せぬが、兎に角妥當と思へぬ。

乙圖の南關社圖は興善寺の所在地、即ち唐時代の朱雀街の直東邊に當るべき場所を基點として、東方へ毎方二〔支那〕里の方眼を配してある。常盤博士の希望さるゝ如く、甲圖と乙圖とを重ね合せて對比せんとするならば、是非甲圖をも乙圖同様に朱雀街を基點として、東方へ毎二〔支那〕里の方眼を配すべきでない歟。また圖中に明記されざる

大雁塔を中心としていはなく、位置の明指されてある、朱雀街に接せる興善寺をこそ基點として甲乙二圖を重ね合せて對比すべき筈であるまい歟。

以上四項に分つて述べた私の疑問は、當然常盤博士の論據を動搖せしめ得るものと確信して居る。果してこの疑問を正當とすれば、常盤博士の依用されて居る甲圖乙圖は、當然次の如く改訂すべきものと思ふ。

北宋の宋敏求の『長安志』に據ると、興善寺は靖善一坊の地を占めたといふ。故に乙圖の興善寺の所在地を甲圖の靖善坊に重ねて對比すると、甲圖の新昌坊の位置は可なり乙圖の祭臺村の位置と一致する。殊に石佛寺はその祭臺村の東北部に在るといへば、(大正十四年二月號『新興』三一頁參看)石佛寺の位置と青龍寺の位置は、頗るよく一致する。されば青龍寺の遺址は、祭臺村より更に

今城唐城合圖 每方二里
 記¹慈恩寺 記²興善寺 記³青龍寺
 (甲)

							昌新	延興門
							記 ³ 出	
記 ² 善靖			寧	永	平	昇	道	昇
	善	安	國	昭	行	脩	政	立
			昌進	記 ¹	政	脩	化	敦
			善	通	龍	青		
					池	曲		
門德明			門夏啓					

南關社圖 每方二里
 (乙)

寺善興	坡廠草		魯家村	祭臺村
村寨小	村河水	大雁塔村	村後	觀音廟
村里八			廟坡頭	岳家寨
				百池頭村

東邊少くとも一〔支那〕里の方位に求めざるべからずといふ、常盤博士の主張は到底成立し難い。

一體方眼圖は古くから支那で發達して居るが、左程正確なものでない。『嘉慶咸寧縣志』所收の方眼圖は、局限された地方のことゝて、大體の歩測位は行ふたかも知れぬが、勿論科學的測量に據つたものでない。従つて大體の目安には供し得ても、之によつて綿密な距離などを測定することが出来ぬ。私の手許に在る光緒二十五年（一八九九）刊行の『陝西全省輿地圖』は、每十里の方眼圖で、その測量方法も嘉慶時代より進歩して居り、可なり信頼すべきものであるが、之を『嘉慶咸寧縣志』卷一の方眼圖と比較すると、同一なるべき村鎮の位置方向等に、随分異同が見當る。

常盤博士がかゝる方眼圖に信頼し、之を根據として、青龍寺の遺址と祭臺村との比較異同を論ずるのは、抑も最初の第一歩を誤つた者と申さねば

ならぬ。況んや博士はこの方眼圖よりも、一層不精確なるべき趙嗣の「訪古游記」の里程に絶對的信頼を置き、之によつて方眼圖に手加減を加へ、初より信頼し易からざる方眼圖を、一層信頼し難いものにいたし、之を根據として青龍寺の遺址を論定せんなどは、實に二重に誤謬を襲ぬるものと申さねばならぬ。私は當初からかゝる方眼圖によつて、距離を決定すべきものと思はぬ。たゞ常盤博士の提出された甲乙二圖の對比によつても、博士の主張とは反對に、青龍寺の遺址と祭臺村の位置とが、存外よく一致することを説明したまでである。之に據つて祭臺村説の正確を證明せんとする意志でないことを、特に茲に附言して置きたい。

七

常盤博士は又唐の長安城内に於ける興善・慈恩・青龍の三寺の相互の距離方向關係を、唐の長安の坊制を根據として測定されて居るが、大體の

方位に間違ひないとしても、局部に就いては疑惑を挟むべき餘地がないではない。博士は

興善寺と慈恩寺との間は、都城の時には屈曲する行路を取るので四里許となるけれども、直徑にすれば、三里強に過ぎぬ。……而して又慈恩寺と青龍寺との距離如何といふに、都城の折に屈曲する時は、五里許あるけれども、直徑にする時は四里許に過ぎぬのである。されば慈恩寺を中心としていふ時は、興善寺には西北行三里強、青龍寺には東北行四里許となり、興善寺よりも青龍寺の方が遠いのである。……慈恩寺と興善・青龍二寺との方も距離も、些の疑なく明白にするこゝが出来ぬ(三八—三九頁)。

と述べられて居るが、如何であらう歟。慈恩寺は進昌坊の東部に在り、青龍寺は新昌坊の南門の東邊に在り、而して興善寺は靖善一坊の地を占有して居る。故に大體の距離方向は推定されるにしても、些の疑ない明白にして精確なる距離方角まで

は、現在では誰人と雖ども測定し難い歟と思ふ。抑も慈恩・興善の距離は、進昌坊の那邊を基點とし、靖善坊の那邊を終點として、測定すべき歟。『嘉慶咸寧縣志』卷三所收の今城唐城合圖の諸寺の位置は、大體を指示するに過ぎぬ。慈恩・青龍二寺に就いても、同様の疑問が起る。

併しこの疑問は姑く措き、それより一層の疑惑を感ずるのは、唐時代の興善・慈恩二寺と、現在の興善・慈恩二寺との位置の關係である。今の興善寺は唐の興善寺の境内に在ることは明瞭であるがその四至は決して舊の儘でない。今の興善寺は到底舊の靖善一坊の地を占むる程の廣大なものでなく、纔にその一局部に當るに過ぎぬ。今の興善寺の位置が舊の興善寺の境内、即ち靖善坊の那邊に該當すること歟。靖善坊の東南隅に當る場合と、その西北隅に當る場合とによつて、直に一〔支那〕里以上の相違を生ずる懸念がある。慈恩寺に就い

でも同様の懸念を免れぬ。今の慈恩寺の位置は、唐の慈恩寺の境内に當り、然もその境内の一部のみを占むること疑を容れぬ。此等の點につき常盤博士は何等の考慮を加へられずに、今の興善・慈恩二寺の距離を以て、直に唐時代に於ける該二寺の距離に擬せらるゝのは感心出來ぬ。大體論としては兎に角、一〔支那〕里の距離を爭點とする問題に、この異同を全然看過さるゝのは、行論粗笨の憾を免れぬと思ふ。

常盤博士の論文に就いて、私の一番遺憾に思ふ點は、餘り信頼出來ぬ趙嗣の「訪古遊記」の記事に、絶體の信用を置かれたことである。博士の錯誤の大半は之に起源して居る様にさへ見受けられる。博士は

明の趙嗣は實地の踏査を叙述して、自永寧門、至薦福寺三里許といひ、出寺南行、又三里許、爲興善寺といひ、出寺東南行、又三里許、爲慈恩寺と言つて居る。如

何にも實地に合する記事である(二八頁)。

と述べられて居るが、實地に合する所か、趙嗣のこの記事は頗る實地に合はぬ。第一に永寧門が唐の長安の那邊に該當すべきやを明示せずに、永寧門から薦福寺に至る距離三〔支那〕里許が實地に合ふや否やは決定し得ぬ筈でない歟。薦福寺より南行三〔支那〕里で興善寺に至り得るものとすれば興善寺より東南行三里許りで慈恩寺に達せられる筈がない。唐の長安の城坊圖を檢しても、薦福寺と興善寺とは縦に安仁・光福の二坊を距つるのみで、興善寺と慈恩寺とが斜に安善一坊と進昌坊の大部分を距つるものを、均しく三〔支那〕里とは受取れぬ。

私も去る明治四十年の秋に、西安探訪の際に、薦福・興善・慈恩の三寺を親踏した。當時の記憶に據ると、私は興善寺より直接に慈恩寺に往かなかつた、従つてこの二寺の間の距離は、當時の手記

に登錄されてない——永寧門（大體に於て唐の安上門の所在地に擬定される）から薦福寺——小雁塔の位置を基點として考察すると、今の薦福寺は唐の薦福寺の原位置から移動して居るかと思ふ——に至る距離は、薦福寺より興善寺に至る距離に比して可なり遠く、興善寺より慈恩寺に至る距離は更に遙に遠い。興善・慈恩二寺間の距離は、薦福・興善二寺間の距離に比して優に二倍する程かと思ふ。趙輔はこの三寺の距離を何れも同様に三〔支那〕里とするは、到底信憑することが出来ぬ。所が常盤博士はこの興善・慈恩二寺間の距離三〔支那〕里といふ、到底信憑し得ざる記事を金科玉條とし、之を標準として青龍・慈恩二寺間の距離を伸縮し、又は議論さるゝ、其處にすべての間違ひの原因が存するのなからう歟。

最後に私が今一つ常盤博士の論文を通讀して遺憾に堪へぬ點は、博士は青龍寺即石佛寺説を否定

するに努力せらるゝのみで、積極的にその所信の青龍寺の位置を明示されないことである。博士は或は、

五里の青龍寺の位置ニ二里半の祭臺村の位置ニは一致せざるこゝ明白でない歟（三九頁）。

といひ、從つて青龍寺の遺址は、今の祭臺村より更に二〔支那〕里半を距つる方位に求むべきを主張せるが如く、或は

祭臺村の位置は、古の昇平坊か精々宣平坊の南部に當らねばならぬのであるから、新昌坊の青龍寺は、正に一里以上の距離がある（三九頁）。

といふ。博士よりの私信に據ると、博士は後説を採り、青龍寺は祭臺村より一〔支那〕里以上東方に存すべきものと信せられて居る様である。博士は又

早崎氏が宛かも古の青龍寺に該當する郊外地下の家から（唐時代の）石佛を將來した。村人もこの地下の家を、青龍寺と言つて居つたのである（四一頁）。

と述べられて居るが、さて博士が古の青龍寺の位置に該當すると明言せらるゝ場所は、現在の何村であるの歟。祭臺村の石佛寺の所在地から東に當るのか、東北に當るの歟。祭臺村から一〔支那〕里の距離に在るのか、二〔支那〕里の距離に在るの歟。すべて此等の諸點は、一も明示されて居らぬ。古の青龍寺の位置に該當する、博士の論文の生命とも申すべき重要な場所が、具體的に殆ど明示されて居らぬ。誠に手頼りない記事と思ふ。

八

以上論述した所を要約すると、常盤博士の所説に、尠くとも左の如き缺陷がある。

(一) 常盤博士が青龍寺の遺址を查覈せらるゝ場合に、近き延興門の位置を基點とすべき肝心の要件を看過されて、遠き大雁塔(即ち大體に於て慈恩寺)や興善寺を基點とされたのは、一大弱點たるを免れぬ。

(二) 大雁塔を中心としての甲圖と乙圖との對比によつて、青龍寺の方位を決定せんとする方法は、間違ひを生じ易い。

(三) 明の趙燾の「訪古遊記」の記事に、絶對的信用を置くのは間違である。

従つて常盤博士の主張は、文獻上では到底成立し難い。文獻上から觀ると、『嘉慶咸寧縣志』の石佛寺を唐の青龍寺の遺址とする説は、動かし易からざる鐵案と申さねばならぬ。他日科學的な實地踏査を行ふた場合には、或はその説に多少の動搖を見ることがある歟も知れぬが、私はかゝる懸念も先づ絶無に近いものと信じて居る。そは兎に角現在では石佛寺の所在地を唐の青龍寺の遺址と認むるのが尤も妥當と思ふ。(五月十三日稿)